

棚尾まちづくり事業

平成23年11月15日（火曜日）

## 第5回 棚尾の歴史を語る会 次第

進行（小笠原幸雄）

1 前回までのテーマに関する参考意見など

地震の記録、神楽、棚尾橋、源氏橋、棚尾港など

2 テーマ9 「藤井達吉と棚尾」

(1) 資料説明（長田豊治）

(2) 出席者による補足説明、感想など

3 テーマ10 「棚尾駅」

(1) 資料説明（磯貝国雄）

(2) 出席者による補足説明、感想など

4 連絡事項・情報交換など

5 次回日程

第6回 12月20日（火曜日）午後7時から 「棚尾村の瓦屋」 「加藤平五郎」

## 「藤井達吉と棚尾」

### 1 藤井達吉とは

碧南市と藤井達吉の関係について、現「藤井達吉現代美術館」館長の木本文平氏の記載を見ます。

（「藤井達吉の世界展」 1998年4月5日～4月26日 碧南市文化会館 主催：碧南市）

藤井達吉の世界展によせて 木本文平 1998年4月（愛知県美術館企画普及課長）  
はじめに

「ふるさとは、ついにわれを知らざりき 知らざるあわれ、知られざるあわれ」

この歌は、晩年の達吉自身の胸中を発露したのものとしてよく知られており、郷土愛の深さゆえの失望感、あるいは諦観とも言える心情が率直に述べられている。その達吉が亡くなって、はや35年の歳月がたった。35年といえば、一世代以上の時間の経過があり、いまや碧南市の若い世代にとって、いや中高年の世代においても藤井達吉が何者であるかを知る人は殆どいないと言っても過言ではあるまい。これはなにも碧南市に限ったことではなく、美術関係者の間においてさえも日本近代工芸の草創期にあつて奮迅の活躍をした藤井達吉の存在すら語られること自体が稀なこととなっている。しかし、近年、大正時代の藤井の優れた感覚を物語る作品が発見され、徐々にではあるが藤井芸術の再検証が試みられるようになってきた。その先駆けとなったのが、1991年に旧愛知県美術館の閉館記念として開催された「特別展 藤井達吉の芸術」であり、また1996年から97年にかけての新愛知県美術館と東京国立近代美術館で開催された「近代工芸の前衛 藤井達吉展」（東京国立近代美術館でのサブタイトルは近代工芸の先駆者）であった。前者は、帰郷後の作品を中心に東京時代の作品を若干加えたかたちのもので、後者は東京時代の、それも達吉が工芸の改革を希求し活躍した時代の作品で構成されたのであった。

今回の展覧会は、達吉自身が諦観の境地で語ったその郷里の人々が、市制50周年を記念した文化催事として企画したもので、監修を依頼された筆者としても万感胸に迫るものがあつた。従つて、展覧会の構成を考えるヒでも郷里での開催とすることを考慮に入れ、藤井の全生涯に渡る創作活動の展開を網羅する回顧形式のものとした。幸い、各所蔵家の方々からも藤井達吉の出生地での開催ということで温かいご理解を戴き、充実した内容での開催となった。

ここで、藤井の創作活動の展開の特色を語るならば、工芸の革新を求めて精力的な活動を展開した東京時代と後進の育成に意を注いだ帰郷後の郷土時代という二つに大きく分類

できる。当然のことながらこの地においては、帰郷後の藤井のイメージが強く、工芸を手掛けたというよりも、歌、書、日本画、墨画を嗜んだ作家として、あるいは和紙工芸の指導者としての残像があるようだ。帰郷後の藤井の仕事は幾分難解なところがあり、正直なところ一般には理解されにくいものがある。多分、これは直接的に藤井と関わりを持った人にしか理解できない次元が存在するのであろう。しかし、あらためて初期から順を追って藤井の仕事の展開を眺めてみると、晩年の自分の髭で作った筆を用いて描いた《山十題》などの墨絵の世界や、王朝風の雅を連想させるような雲母や色紙、金銀の切箔を用いた一連の《継色紙》などの作品が誕生する必然性が理解される。

では、藤井芸術の帰結とされる《継色紙》の誕生までを、藤井の作家としての歩みとともに紹介していきたい。

### 作家をめざして

藤井達吉の美術との関わりは、彼が17歳の時に名古屋の服部七宝店へ入社した頃からと言える。この七宝店に入ったそもそもの理由は、美術学校への進学を強く希望する達吉であったが、藤井家の経済状態からはとてもかなうものではなく、しかし、少しでもその望みを叶えてやろうとする父・忠三郎の配慮であったと推測される。この服部七宝店での奉公は、達吉にとって七宝技術や図案そして陶器についての認識を深めるまたとない機会となり、後に作家として活動する彼の造形上の基盤を形成したのであった。また、技術的なことばかりではなく、彼の美術に対する考え方や感じ方などは、仕事上の出張などでの収穫によるものである。例えば奈良出張では古美術との出会いがあり、また米国のセントルイスで開かれた万国博覧会への作品搬入やオークション参加などの海外出張では、ボストン美術館を見学し、東西の美術実状を熟覧することによって、達吉の創作上の視点を大きく成長させる有益な場となったのであった。この海外出張は明治37年で、翌年帰国すると会社を辞めて作家になるために上京。その時、藤井は24歳であった。

東京時代当初の達吉は、事業に失敗し上京した父親の世話をする状況であり語るまでもなく経済的には貧窮の極みとでもいうような生活であった。しかし、多くの作家たちとの意欲的な交流のなかから、やがて藤井の作品に対して理解を示す支援者たちが現われたのであった。当時交流のあった作家としては、バーナード・リーチ、高村光太郎、高村豊周、西村敏彦、津田青楓、富本憲吉、浜田葆光、毛利教武、鶴田吾郎などがあげられる。達吉が美術界に登場するのは、明治42年の東京美術工芸展覧会であり、そこには藤井碧村という名前で《籠目透明七宝》という作品を発表している。現実にはどの様な作品を発表したか定かではないが、題名から推測すれば得意とする七宝を用い透かしの入った箱ものであろう。名前に使った碧村の「碧」は明かに郷里への想いを表したものであろう。そして、二年後には、当時、東京美術学校長であった正木直彦氏が工芸の改革を提唱し発足させた吾楽会の会員となり、また、翌年の明治45年にはわが国の近代美術の展開に重要な一石を

投じた美術団体フェウザン会に、洋画家や彫刻家が主体であった同グループのなかで唯一の工芸作家として参加している。さらに、同年創設の国民美術協会の創立会員としても名を連ねており、藤井の作家としての存在が明らかとなってきた。

上京して僅か数年のうちに中央の美術界に登場した藤井の明治末から大正の初めにかけて詳細な行動と背景については、残念ながら現時点では正確な事実関係が解明されていない。この点については、今後の調査を見守って戴きたい。ただ、これまでの調査から、この時期に藤井にとっては重要な人物、つまり大変強力な支援者となった二人の人物との出会いがあった。ひとりはおわが国の近代洋画家たちのパトロンとして歴史に名を残した芝川照吉であり、もうひとは近代日本画家たちのパトロンであった原三溪である。ただし、原三溪の場合は三溪本人と言うよりも支援者としては娘婿の西郷健雄と言ったほうが正確かも知れない。この芝川と西郷は、奇しくも両者ともに岸田劉生の支援者であったことがよく知られている。また、経済的な支援者のみではなく、美術批評の面においても良き理解者の登場があった。当時、美術批評に健筆を振るった西川一草亭がその人である。一草亭は華道去風流の家元であり、画家や小説家、哲学者との交友も多く、進歩的な文化人として知られている人物で、達吉の友人であった津田青楓の実兄でもあった。この縁で、藤井は一草亭にその仕事を知られることとなったのである。大正2年2月9日付けの読売新聞に「新しい装飾美術 藤井達吉氏の作品」と題した一草亭の一文が掲載されている。この内容は当時の達吉の作品の傾向と美術界における彼のポジションが明らかにされているので、参考までにその一文を抜粋して紹介する。

「……私が藤井達吉の名を初めて知ったのは去年の春京都の岡崎で青楓主催の展覧会が開かれた時だった。その時氏は刺繍と七宝の灰皿や何かを15,6点も出して居った、それは皆面白いとはいえなかった、ことに七宝にはどうも安っぽい点があつて厭だとおもつたが、それでも在来の工芸品というものの系統、慣習を破って、直に作者その人の考えから直接に出た点があるのが快かつたのと、今までの工芸品というものが、美術的とか装飾的とか言われる物に限つて厭に気取つた、綺麗な、みがきをかけた、品をつくつた、これが美術品だと言うような顔をしたのが気に入らなかつたが、藤井氏のを見ると丸で違つている。材料も無論粗末な物が使つてあるし、仕事もゾンザイである、そして今までの工芸品に見られない、人が作つた、言い換えれば、作者の真情人間の温床が物の一つ一つに流露している。〈略〉文展の画は一つも買いたいと思わないが、藤井氏の作つた工芸品は金があつたら真に買つてみたい、そして自分の傍に置いてみたいという欲がおこる。……」少し長い引用となつてしまつたが、本文はまだまだ続き、工芸や装飾美術のあり方にも言及し、最後には達吉がフェウザン会で発表した刺繍による壁掛け作品への賛辞が述べられている。引用した文章から判明するように、達吉の制作の方向性は作家自身の人間性を直載的に表現しようとするもので、まさに高村光太郎が雑誌『スバル』に掲載した「緑色の太陽」の主張を実践するものであつた。

## 工芸界の前衛として

大正時代に入ってから達吉は、近代工芸の前衛として彼自身の言動が美術界や工芸界でさまざまな波紋を呼び起こすようになっていた。なかでも文展の工芸部門設置運動への関わりが注目される。これは、明治40年に開設された文部省展覧会(文展)に工芸部門を設置するよう津田青楓らとともに奔走したことで、この行動は結果としてその後の藤井自身の進退を大きく左右することとなった。ところで、藤井や津田等を奔走させた文展について語る前に、少し明治から大正に至る当時の工芸界の実状について述べておきたい。

明治時代の工芸界は、維新による構造的な社会変革のなかで、伝統的な体質によって維持されてきた生活環境そのものが破壊され、一時はその存続すら危ぶまれたのであった。しかし、時の政府の国家経済の安定をはかる産業振興計画の路線とともに復興の兆しが現われたのであった。それは、万国博覧会への出品や外人技師を招き先進技術の指導を受けるなど、富国政策の一環としての振興策によるものであった。その結果、当時の工芸界は精練な技を誇る職人的技量を重視する作品が主流となったのであった。やがて、明治の後期になって、単に物珍しい東洋趣味的な領域での活動には自ずから限界が生じてきた。つまり実際に製作する工人自身がオリジナルな発想のもとに創造的な美意識をもった作品を手がけたいと思うような時代が到来したのであった。丁度、先に述べた高村光太郎の「緑色の太陽」が発表された頃であろう。

この時期、達吉は工芸も絵画や彫刻と同様に、作家の内面性が発揮された独創的な作品を創り出すべきと主張し、実践したのであった。そして、絵画や彫刻の世界に比べて芸術性が劣るとされる工芸界のレベルアップをはかるために、装飾美術協会の創設などに尽力するが、さらに全体の意識を向上させるためには国家規模で開催されている文展に工芸部門を設置することが、工芸界全体の意識改革につながると考え、積極的な運動に出たのであった。しかし、このことが後の達吉の運命を大きく変えることとなった。性格的にも激情的な一面がある一方で、非常に繊細な感覚を持ち併せていたために、おのれの榮譽のために藤井は活動していると言う様々な中傷に対し、この要望が成就しても出品しないという自らの進路を宣言してしまった。このため、その後の創作活動は中央美術界を離れ、終生在野の作家としての立場を貫き通すこととなった。この運動はかなり長い年月を要したが、時代が大正から昭和に代わった2年の第9回帝展からようやく工芸部門の設置が認められたのであった。達吉はこの運動の早い時期に関わりを持っただけであったため、当然のことであるが近代工芸史のなかでは帝展に工芸部門の設置の牽引者としての項目に名前が列記されていない。

創作活動の一方で、彼は雑誌『主婦之友』との連携で「手芸」の普及に尽力している。これはある意味において、工芸美術の魅力を広く一般に浸透させようとする啓蒙活動と捉えることが出来る。この活動は、同誌の社長であった石川武美から依頼されて始めたものであるが、大正10年から昭和5年まで続いた。内容は、染色、木工、金工、図案そして彫

刻にまで及ぶもので、理論と実践を同時進行させるものであった。この活動について、工芸家・高村豊周は『工芸時代』に掲載したエッセイ「ある断面」で次のように述べ評価している。「……藤井君が家庭手芸における功績は永遠に没するべからざるものである。主婦之友誌上に何年かに亘って連載した家庭手芸の製作法がもし無かったとしたならば、日本の家庭手芸はどの位発達がおくれたであろうか、想像するに難くない……」。手芸の普及もさることながら、藤井はこれらの活動を通して図案の重要性を力説したのであった。この図案重視のことは、昭和4年に創設された帝国美術学校(現武蔵野美術大学)の図案工芸科の筆頭教授に就任し、自説の講義を行ったことや、昭和6年の名古屋市立工芸学校(現名古屋市立工芸高校)の図案科廃止問題が起こった時には、その廃止撤回のために尽力するなどの行動からも明かである。

昭和初期の達吉の行動を分析すると、大正時代とは明らかに違うものがある。大正時代には自らの制作に激しく取り組んでいたのに比べ、徐々にではあるが、後進の育成という教育者的な立場へ変化していった。この背景には、中央美術界への失望という大きな影が映し出されている。

#### 漂泊の時代へ

この漂泊という言葉は、達吉自身が好んで用いた。一般的に達吉の漂泊の時代は、昭和20年に疎開を兼ねて郷土愛知へ戻ってきてからとされるが、その兆候は既に中央美術界との決別を決意した昭和の初期から始まっており、東京から神奈川県の実鶴へ移転した頃は、間違いなくその時代へ入ったと言える。

さて、この時代に入ってから達吉の仕事は、立体的な作品よりも平面的な作品を数多く手がけるようになり、むしろ工芸と言うよりも絵画的な仕事へと移行をみせるのである。そして、中央美術界を離れた時の心境を「昔日の素人になって 浪々とおもひのままに 日をおくり 食ふなくば死すといふのは 名利なくケンゾクなき身の心やすさよ」と自伝的随筆『矢作堤』で語っているが、その昔日の素人になってと言う表現を初心に戻ってと捉えるか、あるいは第三者を意識しない自分だけの世界で生きるということの意味するとみるのか少々躊躇するが、やはり、その後の仕事から判断すると後者の自分だけの世界と解釈し、中央との決別を意味していると理解するほうが適当であろう。

実鶴での仕事は明らかに日本画が多く、宮内庁へ献上のための工芸作品も制作したが、その頃は構想と図案が達吉で、実際の制作は達吉が後継者と見込んだ勝文彦などの若い作家たち任せている。やがて達吉の作品は、紙そのものの素材に注目する傾向をみせてくる。これがいわゆる戦後の小原村の和紙工芸につながっていくのである。そして、達吉は日本画から和紙作品を経て総合的な美意識の結集として、絵画、図案、工芸、書、歌を結合させた「継色紙」の世界の完成をみせて自身の芸術の帰結としたのであった。

## 2 藤井達吉 略年譜

明治14 (1881) 年6月6日

藤井達吉は、碧海郡棚尾村字源氏に米屋、藤井忠三郎の三男として生まれた。学校は妙福寺にあり、達吉は勉強もよくしたが、腕白で腕っ節が強く勇ましい少年であった。幼い頃から手先が器用で、図面・工作が好きで、着物を縫い上げる程の腕前で、凧に描いた絵もうまかった。“針吉”“凧吉”とも呼ばれていた

平岩種次郎 明治13年(1880)生まれ 小学校4年間達吉とよく遊ぶ。

父は平岩幸左衛門 日本で最初の平岩式毛織り織機を製作販売  
昭和27年(1952)10月の葬儀には達吉も送る。

永井治郎(後の永井治郎平)明治14年4月(1881)生まれ 永井酒造  
達吉の同級生 後の棚尾町長

明治25年 (1892) 11歳

この頃、愛知県知多郡大野の木綿問屋尾白株式会社(後の尾白商会)に入る。



14歳

明治28年 (1895) 14歳

元山支店勤務となり朝鮮に渡り、砂金の金塊への鑄造に従事する。

明治30年 (1897) 16歳

元山より帰り、尾白株式会社を退社。台湾に行き兄女二郎の雑貨商を手伝う。



10代後半

明治31年(1898) 17歳

芸術への志が芽生え「美術学校に行きたい」と親に頼んだ。父に反対されたが、母は達吉の才能を考え、名古屋の服部七宝店に就職させた。

明治36年 (1903) 22歳

第5回内国勸業博に出品するために大阪に行き、帰途奈良に寄って寺を訪ね、はじめて古美術に接する。

この頃より絵を描き歌をつくる。



22歳

明治37年 (1904) 23歳

米国セントルイス万国博に七宝焼き出品のため渡米した。

明治38年（1905）24歳

ボストン美術館にて東西の美術作品に接して帰国。  
服部七宝店を辞めて上京、美術工芸作家としての道を  
歩き始める。

明治40年（1907）26歳

この頃七宝の事業に失敗し、兄は失踪、貧窮の中で  
美術工芸家への道を探る。

明治42年（1909）28歳

東京美術工芸展覧会に《龍臣透明七宝》を出品  
（藤井碧村として）。

明治43年（1910）29歳

この頃、父の商売もうまくいかず達吉をたよって郷里から一家7人が上京し貧しい  
東京生活を始めた。上京した家族と上野桜木町に住み、バーナード・リーチを知る。



23歳



明治43年「海」七宝



24歳頃



24歳頃

明治44年（1911）30歳

この頃、渋谷宮益坂に住む。  
吾楽会の会員として招かれる。  
琅扞洞に茶道具・土瓶等の工芸品を出陳し、海展覧会には七宝作品を出品。  
このころから芝川照吉の支援を受ける

明治45・大正元年（1912）31歳 ヒュウザン会 国民美術協会に参加

フユウザン会展に刺繍壁掛の《銀杏》《花鳥》を出品。  
この頃、河合卯之助らと軽井沢に滞在して三笠ホテルに壁画を描き、草花の  
スケッチにも力を入れる。吾楽展に《海模様七宝花瓶》《橘模様壁掛》を出品。  
第1同行樹社展に《濱》を出品。



ヒュウザン会展覧会の目録  
 (ヒュウザンとはデッサンで  
 使う「木炭」のこと)



大正2年 (1913) 32歳

父忠三郎死去。

現代大家芸術品展覧会(三越)にアッシリア風の  
 虎狩の図のある手箱等を出品。

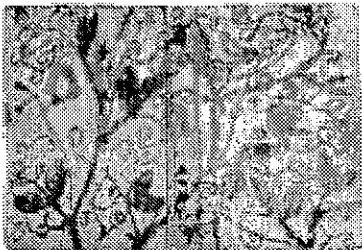
藤井達吉、濱田凍光、山内神斧三人展(大阪)開催。

国民美術協会第1回西部展覧会に、《天女(銅打出)》《小鳥》《蜻蛉》等の屏風作品  
 を出品。

音楽のお盆展覧会に鳳凰や鶏の七宝丸盆を出品。

大正3年 (1914) 33歳

長田幹彦著「霧」の装丁

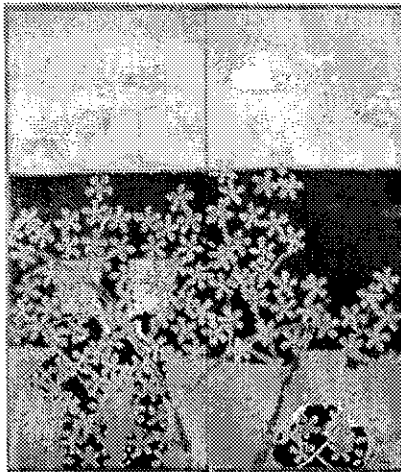


大正4年 (1915) 34歳

風景(池畔) 油彩 大正4年

大正5年 (1916) 35歳

大島風物図屏風を制作



36歳

大島風物図屏風  
 (西郷コレクションから)  
 (碧南商工会議所蔵)

大正7年（1918）37歳

文展に工芸部門設置を働きかける

家庭工芸を「主婦の友」に紹介 白木屋百貨店図案部顧問

明治の終わりから大正時代にかけての藤井は、吾楽会、フェウザン会、装飾美術家協会、日本美術家協会、无型などの前衛的なグループに参加して当時の気鋭の画家・彫刻家・工芸家と親しく交わりました。制作でも古い型にとらわれない斬新な作品を生み出しました。木を彫り込み、螺鈿や七宝、鉛を用いた《草木図屏風》（東京国立近代美術館蔵）やアップリケや刺繍を施した《大島風物図屏風》（碧南商工会議所蔵）などはこの時代の藤井の代表作といえるでしょう。藤井の全業績の中でも大正時代を中心とした時期に制作された作品は強い魅力を発しています。当時の藤井は家庭婦人向けの工芸の手引書を執筆し、雑誌『工芸時代』の創刊に協力するなど幅広い活動をしていました。更に官展に工芸部門を加えるための運動を友人たちと行いました。この運動は大正12年の帝国美術院への美術工芸部門設置という形で実を結びました。



36歳



30代

大正11年（1922）41歳

花蓑に誘われ高浜虚子、達吉が光輪時での句会に参加

永井寛水主宰の俳誌「アヲミ」に表紙絵の協力

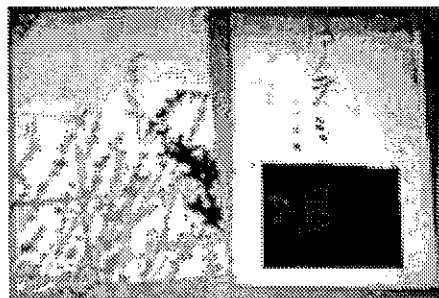
「永井寛水」明治13年（1880）生まれ 名を四三郎 大浜村材木屋磯貝平七の四男

長兄 国太郎は棚尾小学校校長 明治37年（1904）永井きくと結婚

大正3年回覧誌「アヲミ」発行 大正10年（1921）謄写版刷り「アヲミ」発行

大正11年10月第9号から活版刷りとなり鈴木花蓑、杉浦冷石らが協力

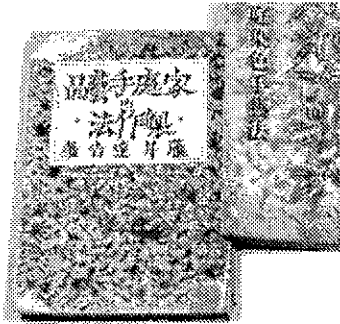
大正11年12月20日光輪寺にて高浜虚子と句会 揮毫を題字に表紙絵を達吉が飾る



俳誌「アヲミ」

大正12年（1923）42歳

「家庭手芸品の製作法」主婦の友社より出版



44歳

大正15年（1926）45歳

碧南国民学校に窯業科設置を提案するも  
猛反対を受ける  
碧焼きを新川の縦山平一郎の窯で焼く



アヲミ焼  
(棚尾小学校蔵)

しかし昭和に入った頃から軸足は次第に中央から離れていきます。藤井は独学でした。また大きな展覧会に作品を出品することもほとんどなく、画商に作品を売り込みもしませんでした。その分記録が少なく、活発な活動に反して日本近代美術史で取り上げられる機会が減っていったのです。最近では藤井の業績が見直されるようになってきました。平成3(1991)年に愛知県美術館で開催された「藤井達吉の芸術—生活空間に美を求めて」展以来、近代日本工芸が揺籃期にあった頃、即ち中央で活躍していた時の藤井の先駆的作品が評価されるようになったからです。

昭和2年（1927）46歳

瀬戸で指導



46歳

昭和3年（1928）47歳

花蓑に誘われ高浜虚子、達吉が光輪時での句会に再訪

昭和4年（1929）48歳

帝国美術学校図案工芸科教授12年間  
平岩幸左衛門の寿像設置に協力



48歳



40代後半

昭和27年に習志とれた学  
習者立役門の内陣。第一  
延焼

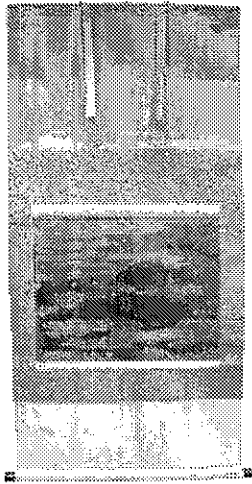


習志も学術家の故に作る  
延焼時の記録



昭和4年 宇野村の考案博覧会での記念写真  
習志に授けられた「日」の旗。その旗の下  
の宇野村の学術第一

昭和9年（1934）53歳 棚尾小学校の新校舎完成に際し「日の出」寄贈



「日の出」



しだ図 篠



54歳

昭和10年（1935）54歳

東京大井町から真鶴に転居  
内親王御成婚祝い品の屏風献上

昭和20年（1945）64歳

真鶴から小原に疎開 小原農村美術館を設置  
小原の青年に「紙漉工芸」を指導する



（茶室は後年「瀬戸」に移築改築され「無風庵」となる）

昭和25年（1950）69歳

長田秀吉（光浴・長田眼科）の奨めで  
碧南道場山町に転居



73歳



68歳

昭和31年（1956）75歳

沼津に転居 その後岡崎に転居  
3月山中泰三編集の「藤井達吉翁」出版  
達吉自らが赤で校正をしている



83歳

昭和39年（1964）83歳

岡崎市民病院にて逝去 釈達翁

藤井は転居を繰り返したため住まいこそしばしば変わりましたが、後半生は郷里での後進指導に重きを置いていました。瀬戸の陶芸や小原の和紙工芸の現在の発展の基礎は藤井が築いたと言って良いでしょう。瀬戸や小原（現豊田市）には栗木伎茶夫氏、山内一生氏、加納俊治氏など、直接藤井の教えを受けた方々の幾人かがご健在です。藤井は昭和25（1950）年から31（1956）年まで碧南市の道場山に住んでいました。市内で藤井に接した方々も、西山町の岡島良平氏を最長老として、何人もいらっしゃいます。故郷での藤井の生活を支えたのは碧南市民をはじめとする藤井を敬愛する方々でした。「野菜を持って行った時に水墨をお礼に描いてくれた」というようなエピソードをきくこともあります。後半生の藤井の作品は文人画的性格が強まりました。平安時代の継紙を現代に蘇らせ、独自の工夫で《継色紙風蓋物》（1947年；愛知県美術館所蔵）などの制作を多く行いました。そして昭和39（1964）年、岡崎で亡くなりました。83歳でした。

### 3 没後のかかわり



藤沢「遊行寺」にある藤井家の墓（達吉建立）



中根仙吉書の達吉の歌碑  
（棚尾小学校校庭）

昭和50年 「藤井達吉先生」出版（棚尾小学校長 中根仙吉著）  
平成元年3月「藤井達吉先生」再版 棚尾小学児童によるVTR作成

平成13年8月18日

藤井達吉翁生誕120周年を記念して平成13年8月18日「鶏頭忌」法要開催される碧南市棚尾の源氏で生まれた藤井達吉翁の生誕120周年にあたり、そのご命日が昭和39年8月27日である。達吉翁が最後に目にされた花は鶏頭の花だったので、当日お見舞いに、その花を持参された長田英子（おさだ はなこ）さんの思いでから「鶏頭忌」と名づけられた。明治のころ達吉翁が、棚尾小学校（尋常小学棚尾学校）の校舎として学んだ毘沙門天妙福寺さんで、藤井達吉翁の世界を偲び、思いを馳せたいと準備がされた。

#### 藤井達吉翁調査隊

平成11年2月の棚尾公民館オープンイベントにボランティアがこの指とまれと集まり、翌年発展的に区民館「棚尾ふれあい館」の設計段階から「まちの情報発信基地」となるよう、建物だけでなくソフトとして藤井達吉をテーマに「語り継ごう棚尾の歴史・藤井達吉翁調査隊」が結成された。平成12年8月には地区と共催して長田昌昇氏を講師に第1回勉強会を開催。「棚尾ふれあい館」が11月に竣工した際には、藤井達吉翁コーナーが設置された。その後地元の人たちに「達吉翁」の話を取材記録しながら資料の集積を行っている。

平成18年8月27日

碧南市史料 別巻三 碧南出身の人物伝

「藤井達吉物語」出版 碧南市教育委員会（棚尾小学校長 浅井久夫著）

平成20年4月5日 碧南市立「藤井達吉現代美術館」開館

## 「棚尾駅」

### 1 要旨

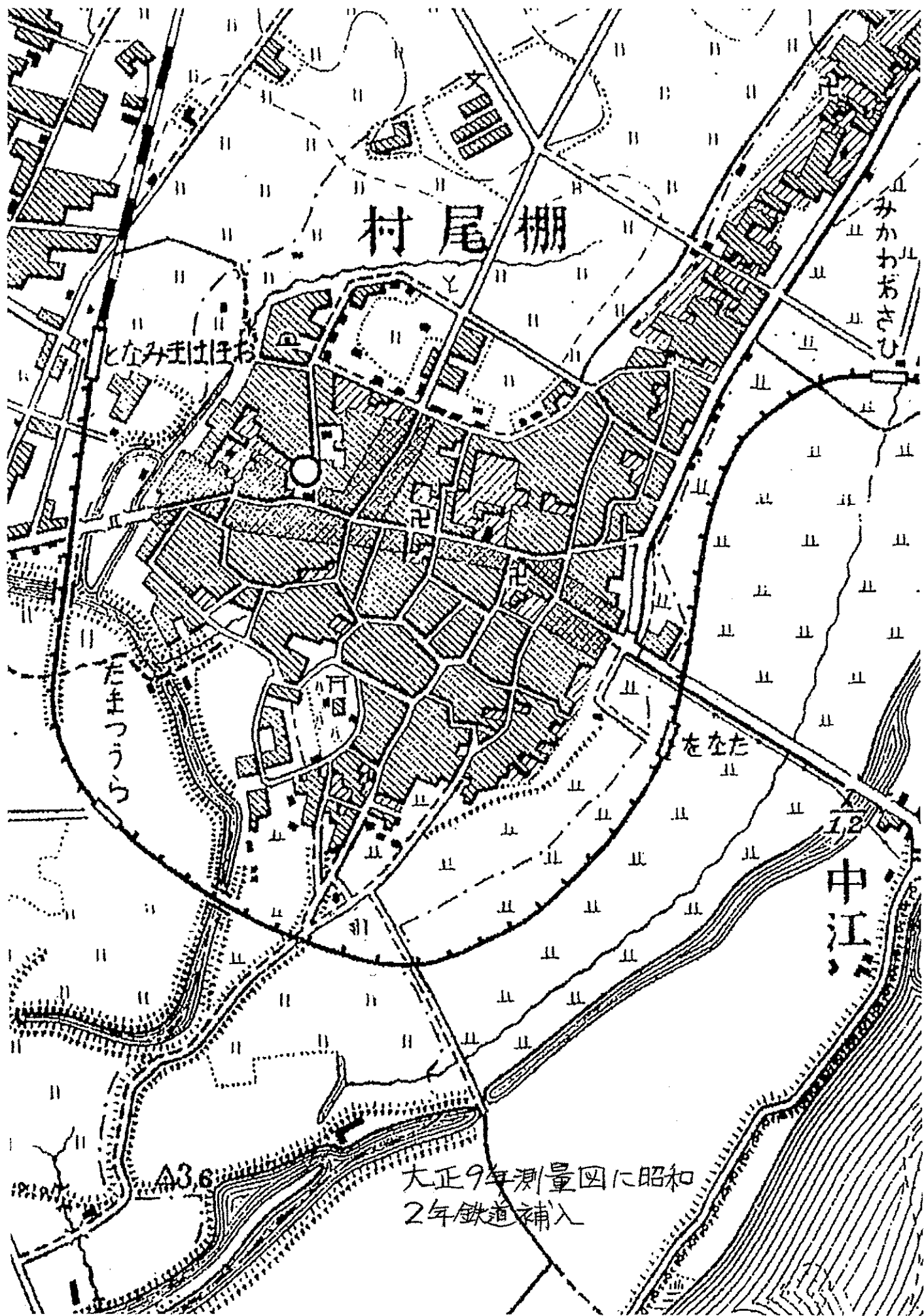
大正3年(1914)に刈谷～大浜間に三河鉄道が営業を開始し、引き続き大正15年(1926)大浜～神谷(松木島)間が開通、棚尾駅も開業した。駅から源氏までの通称棚尾駅前通りが建設されたのもこの時である。

その後、三河鉄道は名古屋鉄道と合併し、名鉄三河線と呼ばれるようになった。この鉄道は往時に貨物輸送が主体であり、棚尾駅からは主に甘藷、ニンジン等の農産物や、鋳物、機械製品が出荷された。利用客では毘沙門さんへ参詣や映画館、お医者さんへ来る人が多かった。

しかし、自動車時代になり、貨物は昭和35年(1960)、又、旅客は昭和41年(1966)をピークに利用も減少し、貨物取扱いも廃止、駅員も無人になった。そして、平成16年(2004)3月に碧南～吉良吉田間は廃線となり、78年間の歴史に幕を閉じた。

### 2 沿革

- 明治45年(1912) 三河鉄道創立
- 大正2年(1913) 大浜～蒲郡間に鉄道敷設免許される
- 大正3年(1914) 刈谷～大浜港間 開通
- 大正4年(1915) 大浜臨港線 開通
- 大正14年(1925) 蒲郡線起工式を大浜尋常高等小学校で行う
- 大正15年(1926) 9月1日 大浜港～神谷(松木島) 開通 棚尾駅開業
- 昭和2年(1927) 棚尾駅舎が竣工
- 昭和3年(1928) 神谷(松木島)～三河吉田間 開通
- 昭和16年(1941) 名古屋鉄道と合併 三河線と改称
- 昭和29年(1954) 大浜港駅を碧南駅と改称
- 昭和40年(1965) 棚尾駅の貨物営業を廃止
- 昭和41年(1966) 7月 棚尾駅 無人化
- 平成2年(1990) 碧南～吉良吉田間にワンマン運転のLEカー運行開始
- 平成16年(2004) 碧南～吉良吉田間 営業廃止
- 平成23年(2011) 矢作川鉄橋撤去完了

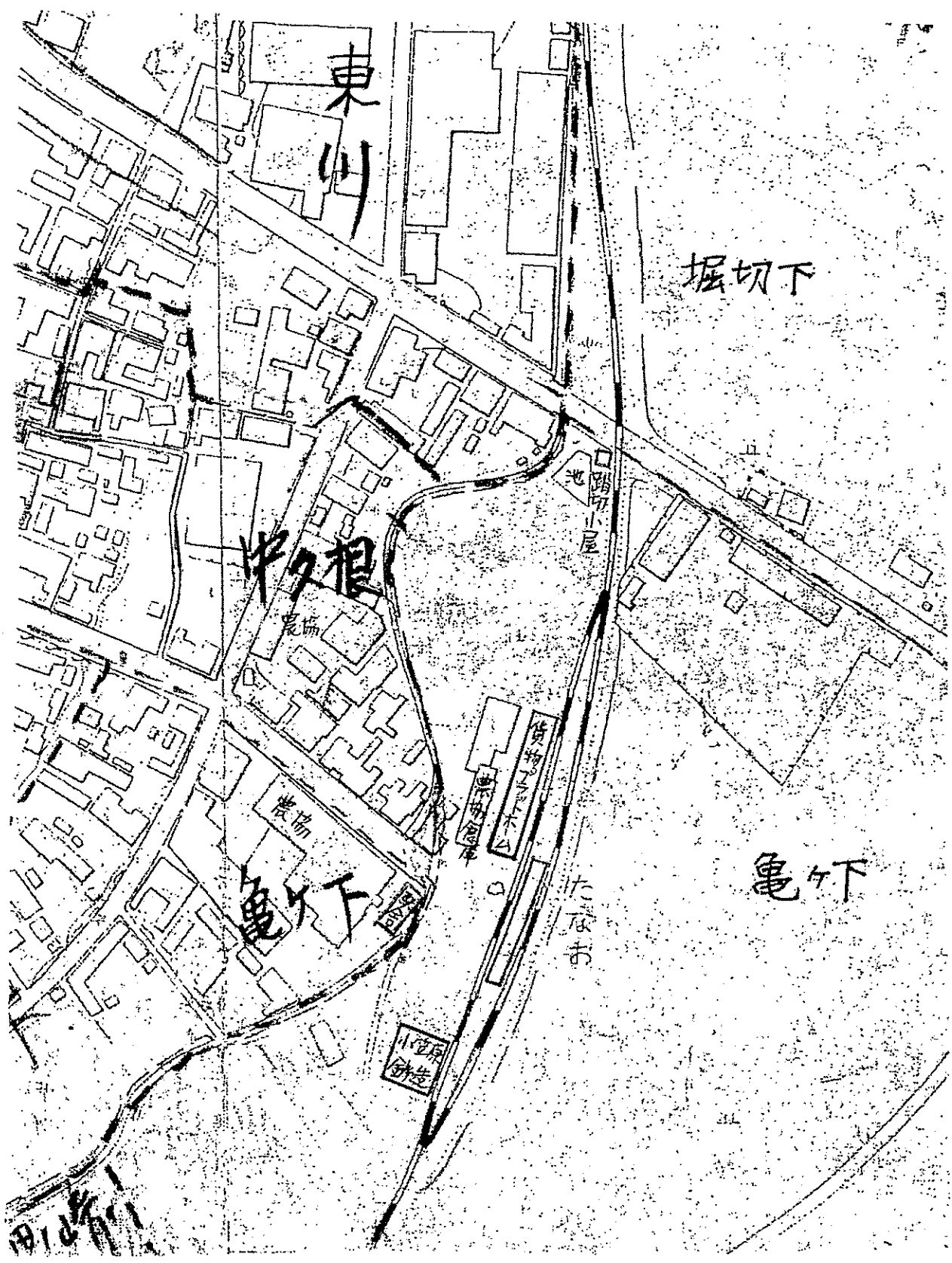


大正9年測量図に昭和  
2年鉄道補入





昭和35年図面



### 3 棚尾駅建設

棚尾駅建設事務所を棚尾町役場内に置く

#### (1) 町民からの陳情及び寄附申し出

陳情提出

陳情書は字ごとに有志が連名で署名捺印し三河鉄道へ提出した

陳情文

「三河鉄道株式会社蒲郡延長線工事着工進行候ニ就テ棚尾停車場設置ニ関シ先町会ニ於テ決定シ更ニ現町会モ亦仮決裁ニ相成リ由三鉄沿線各地停車場ヲ比較シ棚尾町将来ヲ考ヘレハ荷物取扱ヒ得ル停車場設置セサルハ町永遠ノ発展利益ニ多大ナル影響之有事ト確信仕 何卒町ノ前途ヲ慮リ荷物取扱ヒ得ル停車場御設置相成度此段以連署陳情候也」

#### (2) 三鉄棚尾駅落成式招待者名簿

(町会議員)

平岩幸左エ門	長崎重治	永井治郎平	斎藤又三郎	永坂志津松
井上嘉一	石川梅吉	石川宗七	古久根勇蔵	永坂藤太郎
名倉松太郎	斎藤志一郎	石川仙太郎	岡本開太郎	

(西部)

杉浦治助	長田半太郎	榊原甚一	長田秀吉	斎藤徳太郎
長崎静治	鈴木安三郎	斎藤安二郎	杉浦ゑい	榊原和市
黒田亀三郎	小笠原勘四郎	長田助治郎	金原福松	井上好兵衛
永坂和市	杉浦坂治郎	杉浦新右エ門	名倉吉松	斎藤甚四郎
斎藤吉治郎	額田銀行棚尾派出所	長崎竹三郎	生田由太郎	斎藤惣太郎
古久根勇二郎	斎藤宇三郎	多田末吉	杉浦藤太郎	斎藤由太郎
斎藤孝一	小澤源四郎	杉浦重松	杉浦仲二郎	榊原九一
生田六助	亀嶋與吉	榊原安太郎	杉浦喜一	生田岩吉
永坂海二郎	永坂梅吉	井上與七		

(東部)

斎藤倉吉	小笠原半兵衛	永井紺四郎	妙福寺	永井彦右衛門
鳥居亀太郎	小笠原甚之助	小笠原仁一郎	杉浦佐一郎	井上安平
古久根近作	金子光太郎	小笠原白松	加藤周市	石川市郎
三島粟二郎	杉浦玉吉	小笠原嘉太郎	鈴木市太郎	神谷政吉

鈴木春吉	碧海銀行棚尾派出所	小笠原賢吉	永井長次郎	榊原安太郎
坂部武一郎	石川新之助	磯貝善太郎	加藤孫八	斎藤多一郎
石川岩吉	石川安造	小笠原久太郎	寺部亀松	金原梅吉
斎藤良太郎	永井勝治	斎藤てつ	大野賢友	井上源二郎
榊原優一	斎藤悦二郎	永坂曾次	山田和十	小笠原重助
石川松太郎				
(南部)				
杉浦正一	小塚梅吉	杉浦定次郎	小笠原峯松	杉浦近平
榊原房太郎	永坂奎左エ門	石川磯七	石川平吉	鈴木仙治郎
鈴木岩二郎	石川清松	三島初太郎	澤田仙太郎	古久根坂治郎
古久根喜一	井上又三郎	森富三郎	金原量太郎	石川定吉
斎藤勘治郎	杉浦徳太郎	中村やゑ	石川善太郎	杉浦吉治郎
永坂兼治郎	成瀬佐吉	小沢増太郎	石川驥一	石川吉五郎
杉浦梅太郎				
(追加)				
平岩種次郎	大田徳次郎			
(他町村)				
刈谷市	名古屋市	大濱下ノ切	前浜	組合学校長
斎藤仙太郎	鈴木徳太郎	大楠	鈴木猪太郎	杉浦長太郎
(地所寄付者)				
近藤又左エ門	山中律雄	名倉ゆき	石川仁一	榊原れい
岩田以手紙	石川伊三郎			
(神職) 四名				
(官公衙)				
大濱税務署長	新川登記所長	大濱警察署長	大濱町長	新川町長
旭村長	大濱商工会長	新川町商工会長	旭村商工会長	棚尾学校長
棚尾町駐在警官				
(三鉄重役)				
神谷傳兵衛	伊原五郎兵衛	三浦逸平	久米良作	徳倉広吉
大河原榮之助	須藤庄吉	梶尾嘉十郎	石原平一郎	石川八郎治
小出康吉	山口英九郎	小野庄造		

(会社事務員)

(工夫)

(隣接駅員)

(当日乗務員)

(棚尾町役場)

川口金次郎	斎藤力之助	都築繁吉	三島吉松	杉浦忠次
永坂又男	石川五市	辻 一一	岡本	鳥居

使丁二名

(3) 事業報告

大正 15 年 (1926) 7 月 10 日起工

昭和 2 年 (1927) 6 月 19 日竣工

棚尾町字亀ヶ下 43 番ノ 3 外 19 筆

一 棚尾駅敷地 886 坪

内訳	買収シタルモノ	253 坪
	寄附	633 坪

一 建物総建坪 32 坪 5 合

内訳	駅舎	木造瓦葺き平家 1 棟	此建坪	30 坪
	便所	同上	1 棟	此建坪 1 坪
	物置	同上	1 棟	此建坪 1 坪 5 合

一 事業費 総額 金 10,403 円

内訳	建物工費額	金 1,800 円
	水路蓋鉄筋コンクリート	金 830 円
	敷地埋立費	金 2,733 円
	其他附帯事業出費及寄附土地評価等計	金 5,040 円

一 工事請負人

建築	杉浦喜市	(大喜)
基礎コンクリート	石川驥一	(土金)
土工	鈴木安三郎	(土安)

右報告候也 昭和 2 年 7 月 3 日 建設委員長 (棚尾町長) 川口金次郎

(4) 式次第

花火号砲 各員入場

開式の辞

神事 玉串奉奠

事業報告 町長

来賓祝辞

謝辞

閉式の辞

#### 4 利用状況

##### (1) 貨物 往時に貨物輸送に主体が置かれる

昭和34年度～36年度の平均による棚尾駅の貨物輸送状況

発送	3,491 トン	主要取扱い品目	数量	主要仕向け地
		生甘藷	654	東京大阪
		生ニンジン	1,255	東京大阪
		鋳物	1,229	静岡京都
到着	4,929 トン	主要取扱い品目	数量	主要発送地
		鉄くず	1,129	三島横浜
		コークス	482	九州

特徴 農業の特産である甘藷及びニンジンが多い

##### (2) 旅客

###### ア 特徴

毘沙門さんの参詣者が多い

映画館（三栄座）の利用者が多かった

お医者さんへ来る人の利用があった。

###### イ 推移 南中郷土部 資料から抜粋

	乗者	降者
昭和23年	77,660人	79,887人
昭和24年	79,419人	80,870人
昭和25年	87,291人	91,517人
昭和26年	90,120人	95,602人
昭和27年	93,725人	98,169人

5 実現しなかった大浜～足助までの鉄道計画

この鉄道が敷かれるより約 30 年も前に、大浜港から棚尾の町の中を通り、西尾、岡崎を経て足助まで通ずる計画があったが、実現することなく幻しに終わった。

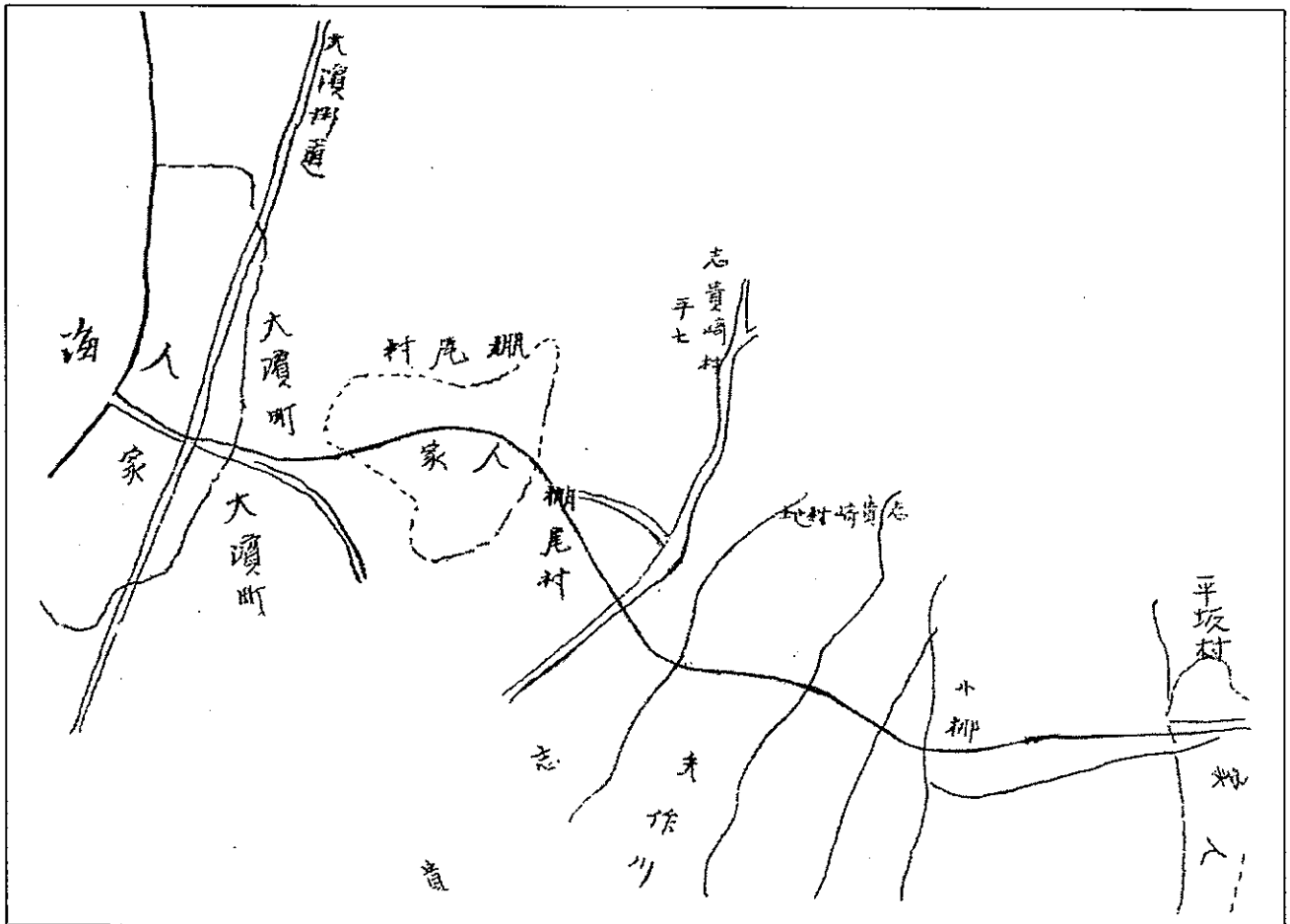
(1) 西尾町史

明治 29 年 (1896) 西野町村大字小間浅井真一は碧海郡大濱町より西尾岡崎を経て東加茂郡足助町に達する県道及び国道に電車線路を敷設せんことを企て、既に線路の予測を了へ、資本金 75 万円を以て参河電気株式会社を組織し、軌道敷設の件を内務大臣に出願したりしが、惜しむべしその実現を見るに至らずして止めり。

(2) 棚尾村文書

明治 30 年 (1897) 2 月 5 日 愛知県知事から棚尾村長へ  
幡豆郡西野町村浅井真一外 7 名ヨリ碧海郡大濱町ヨリ東加茂郡盛岡村間軌道条令ニ依リ電気鉄道布設ノ件出願アリシニ就テハ其村里道ニ関シ得失等村会ノ意見ヲ徴シ 2 月 15 日迄ニ提出スヘシ

【添付図面】



## 6 駅や線路について、お聞きした話

- ・現在の県道岡崎碧南線との踏切には有人の踏切番人がいて、遮断機の開け閉めをしていた。
- ・踏切番小屋に風呂があり、入れてもらったことがある。
- ・戦争中は出征兵士を送った。町を一周して駅に着いた。兵隊さんが一番後部の車両から手を振った姿が思い出される。
- ・東側に家がなかったので、岡崎空襲の火の粉が飛んできたのが見えた。
- ・農協の仕事で倉庫から貨車積みをした。倉庫には藁、縄などが保管してあった。
- ・遅刻しても客の姿が見えると待っていてくれたことがあった。
- ・犬の引っ張る荷車でさつま芋が農協の倉庫へ運び込まれ、貨車に積み込んだ。
- ・三栄座へ行く人で道一杯になった程、賑わった時があった。
- ・待合室に火鉢があった。
- ・丸通の事務所があった。
- ・13号台風の後、堤防が切れ満潮になると線路全体が滝のようになり、海水が流れ込んできた。
- ・電車が4両編成の時、ホームが足りなくて降りれないことがあった。
- ・小笠原鑄造の倉庫付近に石炭が置かれていた。
- ・駅舎近くにナンキンハゼの木があった。
- ・廃車になった機関車が置かれていた。
- ・平岩慶一氏が渡米された時は多くの人が見送った。
- ・駅構内入り口に毘沙門さんの高い看板があった。